

---

# 隣人あるいは同居人

谷津矢車

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隣人あるいは同居人

### 【Nコード】

N6759M

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

アマチュアのCG屋である“私”は、ある日twitterにて“くまきち”なるユーザにフォローされる。何の疑問も差し挟まずに、私はフォローを返す。

最初はあまり気にしていなかった。二千人もフォロワーがいたこともあって、まったく“くまきち”が何者なのが分かっていなかった。“くまきち”のことなど忘れていた“私”は平穩な日々を過ごしていた。

だが、そんな状況が一変する。

“くまきち”が、twitter のメッセージ機能を使って、私に接触を図ってきたのだ……。そして、そのメッセージをきっかけに、少しずつ“私”はズレ始めていくのだった。

夏ホラー2010参加その3。

ユーザーネーム“くまきち”にフォローされたのは、今から半年ほど前のことだ。何の前触れもなく私へのフォロー数表示が増えていた。だが、Twitterでは特段珍しいことでもない。

“くまきち”のプロフィールにはこう書かれていた。「こう書く」と誤解されるかもしれませんが（笑）、スプラッタ物が好きなくごく普通の絵師です（><） 同好の士っぽい方にはフォローしますので、よろしくお願いしますv」。アイコン画面にある、可愛らしいバストアップのテイベアが私を見つめていた。

Twitterを使い始めて一年になる。普通のブログにはない緩やかな関係性。140文字の呟き。相手の呟きを自分のトップ画面に反映させるようにする“フォロー”機能。かといって、フォローされたからといってフォローし返す必要はない。それどころか、一度はフォローしておきながら相手のフォローを外しても（道義的にはさておいて）一切問題がない。元々あまり人付き合いがいい方でもなく、ブログの更新も三日坊主になってしまった私にとって、Twitterは手ごろな近況報告ツールと言える。

私は、アマチュアのCG屋だ。

きつと詳しくない方には分からないだろうが、“アマチュアのCG屋”とは休みの日にパソコンやペンタブなどといったツールを使って絵を描いて、それを画像共有サイトなどにUPするのを趣味としている人間のことだ。ネットスラングでは“絵師”とも称する。パソコンが普及して久しい昨今、“絵師”と呼ばれる人は決して珍しい人種ではない。

だが、（自慢ではなく）私はピンキリで言えば“キリ”側に属している。ネット上に沢山いるアマチュアの小説家さんたちの小説の挿絵を無償で描いたり、あるいは同好の人たちのサークルに参加するうちに、それなりに名前が知れるようになった。今では一人での

活動でもかなりの“集客力”を見込める絵師となっている。

私が画像UP用のブログに絵をUPすれば、山のような拍手とコメントが入る。そのどれもが絶賛コメントだ。「こんな美しい絵、見たことないです!」「なんていうか、画を見て感動したのは初めてです」「明日も楽しく過ごせそうです」……。こんなコメント、当り前のように貰える。

そんなわけだから、基本的には勝手にフォローが出来るTwitterにおいては、一度も会ったことのない人からフォローされることは日常茶飯事だ。むしろ、知り合いからフォローされる方が珍しい。そして、基本的に、フォローしてくれた人にはフォロー返しをするようにしている。もちろん、一度登録されているプロフィールを確認した上でのことだが。

一応“くまきち”のプロフィールを確認した私は、何の迷いもなくフォローを返した。

「フォローしますか?」というアイコンが光る。私の操るカーソルは“はい”ボタンの上で止まり、クリックの音と共に押し込まれた。

その瞬間、私のフォロー数が1701から1702とカウントされた。

最初、特に私は何の注意も払っていなかった。1700もフォローしている、一人の発言(呟き、ツイートとも)はいともたやすく流れてしまう。ホーム画面にはタイムラインといって、呟かれた順に呟きが並んでいる。1700人もいれば、発言の一つ一つはすぐに表示されなくなってしまふ。

“くまきち”の発言もそうだった。他のツイートに流され、私の目に留まることはなかった。

だから、私が“くまきち”というユーザの異常さに気付いたのは、“くまきち”からの積極的な接触を待たねばならなかった。

Twitterには「ダイレクトメッセージ」機能というものがある。通常のツイートは原則全ての人が閲覧可能なのに対し、この

ダイレクトメッセージというのは送った相手以外には閲覧できないようになっていて。フォローをされていないとダイレクトメッセージを送ることは出来ない。一般には私信めいたことや他人の耳に入ってはまずいような個人的な会話に用いられる。そういった性質のもの為、普通のツイートと比べてあまり使用されることはない。

ある日、私のページにダイレクトメッセージが入っていた。ワンルームマンションの一室、私の部屋の端に置かれているパソコンには、Twitter画面が映し出されていた。

差出人は、“くまきち”。

正直、私は“くまきち”なるユーザがどういう人間であるかを覚えていなかった。2000近くのフォロワー。一人一人のパーソナリティを覚えていることなどほとんど不可能だ。

あれ、このユーザさん、どういう人だっけ？ そういぶかしみながら、送られてきたメッセージに視線を落とした。

そこには、こう書かれていた。

“アンタの描く絵は、あまり面白くない”

時折やってくる非難コメント。そもそも、物を作るという作業には反発が多いに予想されるものだ。絶賛コメントを貰えば貰うほど、非難コメントをも貰うといっても過言ではない。それに、本当に評価をされていない人間はそもそも批判さえ貰えない。長い絵師生活でそれは骨身にしみて分かっている。

それに。

この“くまきち”の言葉は、いわれなき批判や誹謗中傷の類ではない。

その文面はわずか一行だったが、私の絵を見た上で“面白くない”と断じているようだ。人間性を云々言ってくる連中とはわけが違う。

なので、私は“くまきち”にメッセージを返した。こういう相手に使う紋切文、「貴重なご意見、ありがとうございます」と。するとほとんどなく、メッセージが返ってきた。そのメッセージにはこう書かれていた。

“アンタの描くスプラッタ絵ってさ、真に迫った描写がない。結局ただのファンタジー”

スプラッタ絵など描いたことがあつたらうか。思わず過去の絵を見返した。

確かにあつた。描いたのは三年前のことだ。ネット上で活動しているアマチュアの小説書き・谷津矢車という人のスプラッタ小説の挿絵を描いたことがあつた。あまりスプラッタ系が得意でない（というより嫌悪感がある）私は、だいぶ苦勞に苦勞を重ねて描いたようだ（“ペンタブの動きが止まる。こんなこと久しぶりだ”と当時の日記にはある）。それに先方さんがかなり我儘だつた記憶がある。だが、苦勞して描いた割には大した反応もなかった。まあ、はつきり言つて、この当時から私の評判の方が先方さんより勝つていて、この挿絵の“仕事”はとんだ骨折り損だつた。そんな経緯もあつて、すっかり忘れていた絵だ。

あの絵の事を言つていいのか。私はPC画面の前で呟いた。だが、一方で反発の思いも湧き起こつた。

それはそうだろう。心の中で呟いていた。絵というものは昔から人間の想像を描いてきたものだ。そして、昨今の絵（CG画に限らず）は、現実に作り出すことが出来ない“イメージ”を描き出すことに特化しているものだ。よく素人さんが言う“真に迫る”ことに本質的な意味なんてない。

だが一方で、その“くまきち”の言葉に、心の奥がかき乱されたような感覚に襲われた。心の奥にある小さな穴が、その言葉で少しずつ押し広げられているような感覚。だが、その感覚の正体が分からないまま、私はパソコンの画面をぼんやりと眺めていた。

しばらくは何も起こらなかつた。いつものように絵をUPすれば山のような絶賛コメントと、僅かな非難がやってくる。Twitterで何かを呟けばフォロワーの皆が反応してくれる。それはいつもの光景だつた。“くまきち”はまるで私の呟きに反応を示すこと

はなかった。まるではじめから私のことなどフォローしていないかのように。

私はすっかり“くまきち”の存在を忘れていた。2000分の1。覚えていられるはずもなかった。

だが、また“くまきち”は私の前に姿を現した。

またもや“くまきち”はダイレクトメッセージを使って私に接触してきた。

“俺は、殺ってるぜ”

たったこれだけの文章だった。最初意味が分からなかった。だが、このメッセの中にある“殺”という字が私を捉えた。パソコンによって隔てられているという安心感もあり、メッセを返した。“何を？”と。すると、“くまきち”はすぐにメッセを返してきた。

“今更犬猫で満足できるかよ。人だよ人”

思考が凍った。

人を、殺した？

そんなバカな。

だが、とてつもない胸騒ぎが私を捉えた。まるで、腹を裂かれて心臓をわしづかみにされたかのような感覚に、思わず息を詰める。

マウスを持つ手が、やがて“くまきち”のアイコンに向かう。矢印がテイベアのアイコンの上で何度も円を描く。Twitterにおいて、アイコンを押すとユーザの吹き一覧を見ることが出来る。つまり、“くまきち”の可愛らしいテイベアの顔アイコンを押すと、“くまきち”の普段の吹きを見ることが出来るということだ。

だが、“くまきち”の吹きを見ることがひどい抵抗感があった。押ししてしまったら、もう後戻りできないのではないか？

見てはいけない物を見ってしまうのではないか？

そんな疑問ばかりが頭を掠めた。

だが、見ることに抗おうとする意識と裏腹に、私の指はマウスをクリックしたがっている。しばらく、意識と手との間で駆け引きが続いた。だが、すぐに意識の方が折れ、アイコンがクリックされて

しまった。そして、“くまきち”の呟きが画面いっぱいに広がった。

“ 抉った ”

“ 締めた ”

“ 焼いた ”

“ 裂いた ”

“ 蹴った ”

“ 折った ”

“ 食った ”

“ 取り出した ”

“ 抜いた ”

“ 吊るした ”

“ 削いだ ”

“ 細切れにした ”

“ 縛った ”

“ 煮た ”

“ 殴った ”

“ 落とした ”

“ 墮とした ”

……。こんな呟きが点々と為されていた。そう、ただ述語があるだけ。主語がなければ目的語もない。5W1Hもない。ただあるのは、“ した ” という何者かの行動についてのみだ。

だが、あのメッセを読んだ後の私からすれば、その意味するところは容易にわかる。逆に言えば、この呟きたちはあのメッセージを鍵にした暗号のようなものだ。

まさか、“くまきち”は人を殺して、その様子を仔細に呟いている？

そうとしか思えなかった。

そう考えが及んだが最後、私の指は止まらなかった。“くまきち”の呟きをどんどん順に追い始めた。140文字まで呟けるTwitterにあつて、“くまきち”の呟きのどれもが十文字に満たな

かった。述語のみが延々と続くのみ。事情を知らない人が見ても、少々奇妙な呟きをしている程度にしか思われぬのだろう。

だが、例外もあった。

41文字。

“そして哀れな子羊は神に一步近づいたのでした。願わくば、次こそは安穩たる恩寵を与え給え”

繰り返すが、42文字。僅か二つの文のみで構成された呟き。だが、普段十文字以上呟かない“くまきち”からすれば、かなり長文の呟きである。

その呟きは大体五十ほどの呟きを経て、ぽつりぽつりと現れる。毎回毎回、唐突に42文字の言葉が飛び出してくる。仔細に眺めるうちに、あることに気付いた。その41文字の呟きのあと、次の呟きまで時間が空く。場合によると十数日も感覚が空いているところさえある。そうして述語だけの呟きが五十ほど、約二時間間隔で呟かれた後にあの42文字の定型文が現れる。

私の脳裏に、ある光景が浮かび上がる。

“抉”られ“締め”られ“焼”かれ“裂”かれ“蹴”られ“折”られ“食”われ“取り出”され“抜”かれ“吊る”され“削”がれ“細切れに”され“縛”られ“煮”られ“殴”られ“落と”され“墮と”された「それ」を見下しながら、PCのキーボードを叩く悪魔のような人格。そして、「それ」が動かなくなるや、まるで全能の神にでもなつたかのように子羊に祝福の言葉を授ける、神、あるいは悪魔。

人間の形を既に取っていないかもしれない。おおよそ考えうる限りの責めを浴び続け、もう人間の尊厳など吹き飛んでいるのだろう。息さえもおっくうに、地面を舐めているのだろう。そんな“子羊”に対して、“くまきち”はどんな祝福を下すのだろう。神父様のような緩やかな笑みを浮かべるのだろうか。それとも、悪魔のように醜悪な相好を崩すのだろうか。そして、どうやって殺すのだろうか。左胸を大きく裂くのだろうか。それとも、首を思い切り締めるのだ

ろうか。それとも、私などには思いの寄らないような手段で以って、子羊を神の袂へと送り出すのだろうか。

PC画面の前で身動きも取れずにいる私をせせら笑うように、メッセーじボックスの数字が一つ繰り上がった。新規メッセが来たのだろう。ゆっくりとした動作でボックスを開くと、やはり送り主は“くまきち”だった。

“お前の「残酷」は想像。頭の中にしかないフィクション。全然面白くない”

このメッセを読む間にも、さらにメッセが加わった。

“お前のスプラッタ絵には血の匂いが無い。内臓の感触がない。骨の固さも無いし腱を切った時の快樂もない。ただ綺麗に描いてるだけなんだよ”

アイコンのデイベアが、ケタケタ笑っているようにさえ見えた。

その通りだ。私は頷いた。

私の絵には血の匂いが無い。スプラッタを描いたは描いたが、私の絵には生命の持つ残酷なまでの醜悪は描き込まれていない。ただ、解剖学的な見地によって描かれた肢体あるいは死体が紙の上にトレスされているだけだ。それは言わば騙し絵。私の絵は、大事な何かがすっぽりと抜け落ちてしまっている。だが、そもそも私の得手はスプラッタではない。こんなに胸を締め付けられる理由はない。なのに。

私の胸に去来するこの焦りはなんだろう。一人、からっぽの胸に爪を立てて掻いた。

それ以来、“くまきち”の啖きが気になって気になって仕方が無くなってしまった。

タイムラインには私がツイートした人たちの啖きが順次入るようになっていく。つまり私の場合には2000人もその啖きが入るわけだ。2000人分の啖きは、それこそ川の流れのように流れて行ってしまう。だが、“くまきち”のことを意識し始めてからというもの、本来なら見逃してしまうような発言が耳に入ってしまう。最近

瘦せただけの、大阪日本橋なうだのといった情報の中に、異質な眩きが滑り込む。“刺した”。“削いだ”。“痛めた”。トップページに踊る明るい眩きに混じって入るノイズたち。それはまるで、極彩色の絨毯に点々と入る染みのようだった。

部屋の電気を消したまま“くまきち”の発言を眺めているうちに、私の心は疼いた。

どうやって痛めているんだ？

どうやって刺しているんだ？

どうやって削いでいるんだ？

だが、その問いに応える者はなかった。

そして、“くまきち”は時折思い出したかのように私にメッセを送ってくる。眩きと比して、メッセは雄弁だ。もしかすると、私以外に見られていないという安心感が、“くまきち”の気を大きくしているのかもしれない。

“おい、いつになったらこっちに来るんだよ？ お前は、こっちの人間なんだろう？”

“匂いで分かるんだよ。おい、一緒に殺ろうぜ？ いい加減シカトするなよ”

その言葉は私の胸を捉えて離さない。

私はそっちの人間じゃない！ 頭の中でそう叫ぶ。だが、一方で胸の奥にじりじりとした黒い炎がくすぶっているのも同時に感じていた。

依頼を受けたファンタジーの挿絵を描いているときに、“くまきち”の言葉が頭を掠める。そうやって葛藤を重ねるうちに、PC画面上で朗らかに笑う赤髪のヒロインは血にまみれ、臓物にまみれ、死にまみれた。気づけば私のペンタブが、死を克明に描き出そうとしていた。何度も何度も絵を駄目にし、いつもの三倍以上もの時間をかけて何とかいつも通りのものを完成させた。

何度も“くまきち”に返事を書くこととした。だが、返事を書くこととする指を、いつもの理性が止めた。そもそも、どんな返事をして

しまうのか、私自身にも分からなかった。  
そして、結局“くまきち”に返事をしそびれてしまった。

さて、これを御覧の皆様は最近ニュースを騒がせたシリアルキラー、通称“くまきち”をご存じだろう。

東京都　市のあるワンルームマンションに住んでいた彼は、自分の部屋に遥かに自分より体躯の劣る小学生を連れ込み、軒並み殺していた。ばれないように、市から少し離れたところに住んでいる小学生を車で攫っていたという。そして、攫った子供たちを考えうる限り出来るだけ残忍に殺し、その成果をTwitterで匂わす程度に呟いていた。

殺した人数、実に八。

もしかすると、その数字にはさらに上乘せがあるかもしれない、ともいう。

だが、いずれにせよ、もう事実は分からない。

余りに“くまきち”はハイペースに殺し過ぎた。そもそも、彼は己の犯罪を隠すつもりなどなかったのだろう。

捜査員が“くまきち”の部屋　腑分け場　に踏み込むや、部屋にいた“くまきち”は手に持っていた鉈で自分の頭を砕いた。脳漿が辺りに飛び散り、赤黒い血が夥しくこびりついていた壁に飛んだ。そうして、シリアルキラー・“くまきち”は死んだ。

知らなかったとはいえ“くまきち”と接触していた私だったが、なぜか遠い出来事のようにしか思えなかった。もちろん、メッセージをかわした相手がシリアルキラーだったことは深い衝撃を与えたが、だが現実の私は何も失っていない。この件に関して警察の事情聴取さえ受けていない。

私は平穏を取り戻した。なんだかんだで今回の件はTwitterというバーチャルの場での出来事ではない。現実の私に降りかかった事件ではない。そうして私は、いつものように仕事とCG画を描く毎日に戻っていった。

Twitterでの眩きを眺めていた。

絵を描き続けるのも集中力を要するもので、倦んだ気を紛らわすためにもTwitterのような形態のツールは役に立つ。今日も私は作業に倦んで、2000人の眩きを眺めていた。

私の目の前で、2000人は2000人の人生の切れ端を語っていた。楽しいこと、悲しかったこと。夢、希望、絶望。それらがまるで織物のように重なって現在目の前に在る。

そして、その織物の中に、染みのようなあの眩きを探してしまう。だが、何処にもない。

何処にもない。その度に、なぜか私の胸が疼く。  
と。

不意にメッセージボックスの数字が繰り上がった。

なんだ？

クリックして開いた。

“おい、いつになったらこっちに来るんだよ？ お前は、こっちの人間なんだろ？ こっちへ来いよ”

テイベアのアイコンが、こちらを見つめていた。

ふと見ると、パソコン台の上、パソコンの真横に鉈が置かれていた。刃に点々と赤錆びが浮かんでいた。まるで、鮮血の赤。

私の指は、実に正直だった。無造作に置かれた鉈の柄を迷いもなく取った。人の頭など簡単に砕いてしまっただろう重さの刃物。そして、“くまきち”と私を隔てていたはずの一切合財をも砕いてしまっ  
う刃物。

私は悟った。

最初から、“くまきち”との間に境などなかったのだ、と。

持っていた鉈を振り上げた私は、部屋の隅にある棚の上に置かれていたテイベアを見据えた。昔の恋人に贈られたものだ。逡巡もなく、そのテイベアに向かって鉈を振り下ろす。臍物のように、綿が腹から飛び出した。

タイムラインに表示されたままの“くまきち”のテディベアは、  
にっこりと笑って私を捉えていた。  
部屋にこびりついている闇がまた一層深くなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6759m/>

---

隣人あるいは同居人

2010年10月11日02時03分発行